

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会 部会（テーマ別検討）の議事概要

- |  |     |       |
|--|-----|-------|
| ○第2回観光交流部会議事概要<br>(検討テーマ：ツーリズム振興、地域資源の活用)                | ・・・ | 1～5   |
| ○第3回観光交流部会議事概要<br>(検討テーマ：地域活性化と地域コミュニティの維持・再生)           | ・・・ | 6～11  |
| ○第2回産業部会議事概要<br>(検討テーマ：次世代にとって魅力的な産業システムの再構築)            | ・・・ | 12～17 |
| ○第3回産業部会議事概要<br>(検討テーマ：環境保全、産業・働き方の魅力発信と人材育成・<br>誘致システム) | ・・・ | 18～22 |
| ○第2回暮らし部会議事概要<br>(検討テーマ：健康づくり・地域福祉)                      | ・・・ | 23～28 |
| ○第3回暮らし部会議事概要<br>(検討テーマ：子育て・教育、安全安心)                     | ・・・ | 29～35 |

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第2回観光交流部会 議事概要

(検討テーマ：ツーリズム振興、地域資源の活用)

### ■ゲストスピーカーからの話題提供

#### ○「ツーリズム振興」を交通から考える～2次交通問題？

《説明要旨》

##### (1) 交通が観光の目的になることも

- ・高速で移動するよりも、時間はかかるがゆっくり景色を楽しみ、自然を感じながら移動することが望まれる場合もある。

##### (2) 地域が守ることを交通も守る

- ・地域が大事にするもの（自然環境等）を交通も大事にすることがとても重要

##### (3) 観光需要が地域交通を支える

- ・少子高齢化が進む集落において、観光客の利用により交通サービスを維持
- ・観光資源が、観光だけでなく、地域の人々の生活も守る。

##### (4) 観光交通は地域の生活を阻害しない

- ・伝統的建造物群保存地区の町並みに自動車は不適切であるため、超小型モビリティを導入（軒下に駐車でき、違法駐車等により地元の人の生活を妨げない）

##### (5) 日常を離れ、そこでしか経験できないこと

- ・ゴージャスでリッチな環境は別に旅行先に行かなくてもいい。旅行先でしか楽しめないものを楽しむのが観光（都市での生活とは別の新たな2つ目の生活を楽しみに旅行に来る）
- ・そこでしか経験できないこととして、何を提供するのが大事

##### (6) その他

- ・観光は非日常を楽しむものであるため、30年後の我々が一体どういう価値観で物事を見ているかという視点が必要（技術の発展によって我々にもたらされるいろんな価値観の変化が大事）
- ・車利用なしで移動できることは、とても重要な観光活性化の要素
- ・小型電気自動車は、車がホテルや空港、病院、マンションなどいろんなところに入れるため、都市構造そのものが変わっていく可能性がある。

### [具体例]

#### ○ツェルマット（スイス）

- ・内燃機関の車の進入を禁止し、電気自動車と馬車が2次交通を担っている。

#### ○明日香村（奈良県）

- ・観光客がコミュニティバスを支えている（観光客により利用が急激に増え、赤字幅の縮小・運行本数の増大を実現）
- ・観光客が利用しやすいようパターンダイヤ（どのバス停にも必ず同じ時間に停まる）を導入

#### ○豊田市足助地区（愛知県）

- ・田園風景を維持している一次産業を守るために、超小型モビリティを活用し、運転免許の返納年齢を遅らせる。

○グルノーブル（フランス）

- ・再生可能エネルギーを活用した超小型EVシェアリングを3次交通にする。

○砥峰高原（神河町）

- ・自然が魅力であるにもかかわらず、自動車のエンジン音が聞こえてしまう。
- ・どういう交通を入れていくか、逆に何を規制するかを考えることも必要

○家島（姫路市）

- ・狭い家島の道でも走れる三輪電気自動車を地元内外の人がレンタルして利用
- ・地域の特性にあった交通を提供することも大事

○書写山圓教寺（姫路市）

- ・容易に自動車で訪れることが出来ないため、自然が維持された。

《質疑等》

〈委員〉

- ・地域の考え方や歴史を含めて、どう地域づくりをするのかということが、それぞれの価値観に繋がると思う。
- ・1つの大きなテーマをもって観光地づくりをしていかないといけない。そのテーマに繋がる公共交通についても同様に考えていくことが重要だと認識した。

〈委員〉

- ・路線バスなどが削減されている状況にあるなか、明日香村のコミュニティバスの事例は関心を持った。観光客の誘致や案内をするなかでも、パターンダイヤについては参考になった。

■意見交換

○中播磨全体で一つのツーリズム

〈委員〉

- ・中播磨を縦の線で考えると、姫路・福崎・市川・神河を結ぶ播但線が1次交通だと思う。そこから、シェアカーやバイク、馬車といったものを2次交通として考えて進めていけばどうかと思う。
- ・中山間地域については、第一次産業を地域資源として有効活用しながら、農業ツーリズムに結びつけることができればと思う。第一次産業を見直し、観光とともに、地元の活性化に繋がるようなことを考えても良い。

〈委員〉

- ・姫路では、通過型観光が課題になっている。それを解決するためには、姫路城プラス1が必要。最近は「体験」や「味わう」等の傾向があるため、体験素材の開発をしないとイケない。
- ・期間が長く、日常なかなか味わえない体験ができる農業は一つの大きな要素

〈委員〉

- ・銀の馬車道等の「歴史文化」の体験を観光資源として発信することも重要
- ・市川を生かした体験も、観光ツーリズムとして成り立つのではないか。
- ・播但線を生かしたサイクルツーリズムという観点でも取組が出来れば良いと思う。
- ・自動車で目的地まで行く人が多いため、播但線の利用が少ないことが課題。地域の公共交通を守るため、少しでも利用が多くなる手法も考えることも必要

### 〈委員〉

- ・播但連絡道が出来たことによるストロー効果で、神崎郡内が通過地点になっている。
- ・バス交通が衰退していくなかで、姫路駅を軸とした扇状の交通網しかない（姫路経由の公共交通しかない）。
- ・人口が減少していくなかで、どうやって1次交通である播但線を維持し、播但連絡道のストロー効果を分断するか、という2つのテーマが大切だと思う。
- ・自力で維持できる地域の交通網を構築し、日常コストの掛からない方法をつくるのが、持続可能な中播磨の姿になるのではないかな。
- ・播但連絡道を通る観光客に、どのようにして中播磨に寄ってもらうかということを考える必要がある。
- ・1次交通、2次交通のゾーン化を考えていくことが大事

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・特に2次交通は大事で、播但線をどのようにして維持するかが、地域の大きな課題になると思う。
- ・コミュニティバスがあったとしても、知られないと意味が無い（誰も知らないバスは走っていないのと同じ）ため、明石市が提供している「バスロケ」のようなサービスをつくることは大事である。
- ・地域の産物を味わい楽しむことは旅行の目的の一つ。第一次産業の体験は大事
- ・地元産の麦を使ったパンと地元産のお酒のように、そこで楽しめるものを上手く組み合わせることが大事。それだけを楽しむために、わざわざ足を運んでもらうことが、これからの観光のあり方だと思う。
- ・地元産品の選定や組み合わせは、地域に根ざして、地元の人と一緒に組み立てるべき。地元の人が楽しむパン屋でないと、旅行者は絶対に美味しいと思わない。

## ○地域資源を観光資源に

### 〈委員〉

- ・地産地消の活動をしてきて思うことは、安定供給がされていないがゆえに、食材に限られ、地元の加工業者もなかなか手が出せないことが課題
- ・これからの第一次産業は小規模でいいと思うが、どのようにして多種多様にしていくか、そして若い人が生活の糧としてやっていけるかが今後の大きなテーマになってくると思う。

### 〈委員〉

- ・神河町でも、人参や柚子の産地化・加工化に取り組んでいるが、農家の高齢化が進み、人手が不足していることが課題
- ・「食」はこれからのツーリズムを考えるうえで切り離せない。これに加えて、中山間地域で増えている空き家と上手く組み合わせて、観光の目玉にできればと思う。
- ・30年後の想像は難しいが、今、活用できるものを上手く使っていくことが有意義ではないかと思う。

### 〈委員〉

- ・播但連絡道で但馬に行く人を、いかにして中播磨で引き止めることができるかが

大事。空き家や農地、里山を活用した取組を、今後広めていければ良いと思う。

- ・田舎の人は見知らぬ人に話しかけることが苦手なので、観光客に来てもらうためには、地元住民の意識改革が必要

#### 〈委員〉

- ・伝統行事や祭りなど都会にはないが地域に残っているもの（普段はできないが中播磨に行けばできる）を体験することは観光資源になるのではないかな。
- ・ありのままの状態でファンを作れることが望ましい。30年先までの持続性を考えるとき、あまりお金や労力を掛けずに出来るようなものが理想

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・今後、農産物工場での野菜生産が進むと、手作りの付加価値は一層上がるはず。
- ・工業生産が進むほど、自然や文化、人との触れあいといった歴史やシナリオ、文化性があるもの（コンテンツ+コンテクスト）をつくる必要がある。
- ・文化や祭りなどは「残す」から「戻す」にエンジンのかけ方を変えないといけない。「戻す」ことは、ある意味「作る」こと。今の時代に合わせて、今までの文化や歴史を少し手を加えながら作っていくことが、戻して残すことに繋がるのではないかな。人口減少下において観光客や新規移住者等の協力を得て、いろんな形で戻して作る。そのような動きをしながら、心に訴える観光資源を作ることが大事

#### 〈委員〉

- ・日常生活そのものを観光資源にしていくことが大事。新しい何かを与える観光は、おそらく30年後にはあまり必要ないと思う。日常の地域での祭りや行事をどうやって観光に繋げていくかが大事
- ・「銀の馬車道」は、もっと都市部で博物館のような規模でアピールしないと、地元に着用することも難しいと思う。
- ・播但線や播但連絡道、銀の馬車道、夢前川沿いなどその他エリアも含めてゾーン分けをしっかりと行い、中播磨において地域資源の役割分担をするべきだと思う。

#### 〈委員〉

- ・ターゲットをきちんと定めて、その人たちに合うものを組み合わせて提供していくことが大事
- ・移動手段によって動線が変わるが、最終的にお金が落ちるような仕組みが必要

#### 〈委員〉

- ・田舎の人はボラティアが好きで、何でもタダで提供する傾向があるが、お金をきちんと落としてもらうことは非常に大事なポイント。そうしないとなかなか継続しにくい。

### ○都市部（姫路中心部）と郡部の絡め方について

#### 〈委員〉

- ・繰り返しになるが、播但線と播但連絡道をどう活用していくかだと思う。

#### 〈委員〉

- ・自然体験コースなどのルートを設定したり、郡部での生産物を姫路でPRしたりすれば、姫路の街中とつながりができるのでないかな。一方で、街中と中山間地域で、それぞれ特化・差別化することも1つの方法だと思う。

### 〈委員〉

- ・郡部の生産者による街中でのマルシェは将来的に伸びる可能性があると思う。回転率の良い野菜など農業の儲かる部分は、都市部（ビルの中での野菜づくり）に持って行かれるので、郡部の農家は自分で売る力を付けないといけない。農業そのものを見直していかないと、第一次産業の観光にも繋がっていかない。

## ○家島について

### 〈委員〉

- ・家島の漁業と競りを体験素材として活用できないか考えている。

### 〈委員〉

- ・家島では、コロナ禍で高級クルーザーによる訪問が増えており、今後、高級リゾート地として化ける可能性がある。

### 〈委員〉

- ・家島は神河町と比べると温暖な地域なので、海があるロケーションの中で、キャンプやグランピングなど、リゾート地として発展していく可能性があると思う。

## ○その他

### 〈委員〉

- ・自動運転はこれからどうなるのか、見通しを教えてください。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・今後5年で一般道路が自動運転の車でいっぱいになることはあり得ない。
- ・高速道路は自動運転で走れるようになると思う。またアクセス制御された専用道は、運転支援の機能でかなり走れるようになると思う。
- ・自動運転や運転支援機能が普及すれば、長距離の運転も負担がかなり減少する。
- ・10～15年では、自動運転よりも電気自動車（EV）が早く来ると思う。EVはガソリンスタンドが維持できるかわからない地域や、ガソリンスタンドが少ない地域でも使用することができる。（ランニングコストも少なくなる）
- ・超小型EVは、高齢者の免許返納を留めることに効果があり、これは第一次産業を維持するために重要なことである。
- ・一般的な車両は、自動運転を搭載するにはコストが高いため、自動運転が導入されるのはまず業務用車両である。
- ・コミュニティバスは事業経営よりも運転手不足が課題。運転支援機能が良くなれば、二種免許のない人でもコミュニティバスを運転できる可能性があるため、定年後に地域と一緒に生きるために、コミュニティバスの運転手をする人が出てきてくれる可能性がある。
- ・中山間地域においては、バスの乗り降りをする際に手伝う人がこれから必要になるため、公共交通が完全に無人になるのはまだまだ先のこと。
- ・短い距離だと自動運転もあり得るかもしれないが、運転支援機能を使い、地域の交通をどのように維持していくかを議論することが大事ではないかと思う。
- ・観光については、長距離を車で訪れる人が増えそうなので、そういう人たちが車を停めて、楽しめるものを作っていくといけない。（以上）

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第3回観光交流部会 議事概要

(検討テーマ： 地域活性化と地域コミュニティの維持・再生)

### ■ゲストスピーカーからの話題提供

#### ○地域活性化と地域コミュニティの維持・再生～関係人口論を中心に～

##### 《説明要旨》

- ・ 関係人口とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々。関係人口をどう取り扱うかが重要
- ・ 「交流人口→関係人口」は可能性がある話であり、期待してもいいが、「関係人口→定住人口」は都合の良いレールであり、この発想が硬直化することは問題
- ・ 関係人口には、実際には様々なグラデーションがあり、定住化が必ずしもゴールではない（定住化をゴールにすると面倒くさい）
- ・ 一見さんではないファンを作るためには、魅力づくりやマーケティングが必然
- ・ 関係人口は、KPIのような量的アプローチで効果を計測することが難しい。
- ・ 関係人口を増やすことは目的（増やせば万々歳）ではなく、あくまで手段
- ・ 関係人口というカテゴライズは当人たちにとってはどうしてもよい話。人を選別する必要はなく、柔軟な対応が必要
- ・ 関係人口という言葉が最近使われ始めただけであり、やっていることは今までと変わっていない。しかしながら、この流れをうまくキャッチすることが大事
- ・ コロナ禍で現地を訪問できない時期に関係人口ができることは購買や資金的支援（クラウドファンディングやふるさと納税）だが、お金さえ落としてくれればそれで良いのか？そこに思いはあるのか？
- ・ 受け入れ側には他者を受け入れる寛容性が必要。受け入れ側が「関係人口など必要ない」と言えばそれまで。受け入れ側が「やりたい」と思うことがスタート
- ・ 協働・共生の前提には win-win の関係の構築と信頼(透明性・説明責任)が必要
- ・ 受け入れ側は、棚卸し的に自分たちの地域を見つめ直す（再整理）必要あり。

##### 《質疑等》

##### 〈委員〉

- ・ 「風の人」とはどういう意味か？

##### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ 関係人口は、風のように来て風のように去るので「風の人」と言われる。「土」や「水」ではなく、移ろいやすく暫定的
- ・ しっかり根付く関係人口は血縁、地縁以外は考えにくい。それ以外には期待しすぎてはいけない。

### ■意見交換

#### ○関係人口の創出について

#### ○地域コミュニティへの受け入れについて

##### 〈委員〉

- ・ 神河町の山間部は限界集落が増え、維持していくのが難しくなっている。

- ・関係人口の議論は、地域性が大きく左右する。
- ・関係人口（集落を支える人）は、中播磨地域外の人に限らず、中播磨地域内（姫路の街中の人等）でもいい。

#### 〈委員〉

- ・その地域に興味をもってもらうための選択肢を増やすことが重要
- ・何かを体験してもらう場合も、体験内容に軽重をつけたメニューづくりが必要
- ・北海道の石狩市では、関係人口づくりのために石狩市の農業との関係を構築する3段階のプログラム（ライト・ミドル・コアな関係）を提供している。

#### 〈委員〉

- ・田舎のムラ単位でもリーダーの力量によって差がある。リーダーをサポートする第三者機関が必要
- ・田舎の特徴として、もてなすことに努力しすぎる傾向が強く、休日も大忙しで疲れてしまう。このサービス精神だけを頼りに関係人口を構築することは、将来不安材料になる。
- ・受け入れ側も来訪者側も、もてなしを期待せずに対等な関係性をお互い示せる交流や、そのための手法が未だ熟成されていないことが問題

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・街中と街中の関係人口も、これからは十分あり得ると思うので、必ずしも過疎地域と都市との関係だけで捉えてしまうと、もったいない。
- ・学生は決しておもてなしをしてほしいわけではない。最初は嬉しく思うが、それが継続できるわけがない。できるところからスモールスタートでいい。
- ・学生はありのままの地域を見たいのであり、絵に描いたドラマのようなものを求めているわけではない。リアルな世界で、リアルな人たちがそこで何をしているかに興味があるのである。そのためには、中山間地域に行っても構わないと思っている人たちが一定数いる。
- ・地域側がおもてなしをしたい気持ちも分かるが、おもてなしに過大に労力を費やすとお互いの関係を歪めてしまう可能性もある。

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域では、田舎の部分と姫路市を中心とした都市部は、神崎郡から姫路市内への通勤者が多いため、普段から交流ができています。
- ・神崎郡の農家と姫路市内の人は、農産物の販売やお裾分け等により、関係人口はでき上がっている。買ってもらうだけでなく、畑仕事を手伝ってもらうような手法をこれから田舎の人たちはもっと考えていかなければならない。
- ・畑の管理ができないのであれば、都市部の人に畑を貸して一緒に作業することも、これからもっと取り入れていくべき。ただ、農地、水田等の維持管理の費用をどうするかという問題だけが残るが、その辺はふるさと納税の方式などいろいろ考えられると思う。そういったものをうまくこの中播磨の中で組み合わせ、中播磨の都市部と周辺部の関係人口の厚さをどうやって上げていくかということが一番大事だと思う。そこから今度は域外へ繋げていく。
- ・田舎や都市部周辺はやはり外貨をどう稼ぐかということが地域を維持する上で



は非常に大きい。持ち出しやおもてなしをするのではなく、はっきりとお金をもらおう。やはりビジネスライクでやっていかないと、お互いにやっていけない。その代わり、都市部の人は田舎の人が作った農産物を販売できる場所を提供する等の win-win な関係を中播磨の中でしっかり作っていくことが大事

#### 〈委員〉

- ・神河町では、一番山奥谷奥の集落で会員を募って稲作体験をやっている。これをもう少し発展させて、その地域のファンになってもらうことで、今度は田植えだけでなく、草刈りなど地域の困りごとへの助け船を買って出してくれるような関係に繋げていければと思う。
- ・都市の人と結びつくために、どのように情報発信をしていくか、どのように魅力を伝えるかが関係人口を作るための最初のキーポイントになる。中播磨内外にうまく情報発信をすることで、広がりを作れるのではないかなと思う。

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域外の人にヒアリングし、情報収集しながら組み立てていくのもいいのではないかな。私自身、仕事の関係で30年くらい中播磨地域を離れていたが、改めて見るといろいろ新しい発見がある。他の地域と比べることによる魅力の見つけ方というのも仕組みとしてやってみてはどうかと思う。

#### 〈委員〉

- ・田舎では農業に軸足を置いた交流という話になるが、学生や若い人たちは農業だけに興味を持っているわけではない。
- ・最近、田舎の土日はサイクリングをしている人が非常に増えてきた。住民には分からない魅力を実際に来ている人に教えてもらうことが、今後、2050年を目指した中播磨を作っていく上で非常に大事なキーワードになるのではないかな。
- ・田舎でも女性や高齢者を中心に、畦道を散歩する人が増えてきた。健康志向のためかなと思うが、サイクリングや散歩といったものに軸足を置いて、田舎のあり方を捉えて考えると、もっともっと考え方が変わってくるのではないかな。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ビジネスとして成り立つかどうかはさておきとして、アイデアとしては良いと思う。要するに自分たちで考えているだけでは、その地域の魅力は発見できないので、目の付けどころが違う人たちが面白いと思うものは一体何かということを実際に聞いてみるのが重要
- ・やはり地域の受け入れ側への対価は必然。もちろんそれが高すぎるのはおかしい話だが、一方ですべて無償というのは、お互いにとってあまり良くない。
- ・大学人等からすると行政はすごくハードルが高い。行政のホームページを見る限り、行政視察は受け入れているが、それ以外の人（研究活動等）は何も相談する可能性がない。お互いにとってルーズ&ルーズの関係であり、我々のニーズも伝えることができない。
- ・例えば私の研究室の学生であれば、神河町の農業には興味がない。しかしながら、中山間地域でどのように人々が暮らしているかには興味があって、そういうツアーを組んでほしいと考えており、そのためにはもちろん対価を払う。そ

ここで地域の方々と繋げていただくというのが、私は一つの方法としてはあると思っていて、それは多分、観光の新しい切り口としてもあり得る。ニッチな人たちのニーズを把握した上で、やるべきことは何かを考えるべきではないか。

#### 〈事務局〉

- ・地域の活性化にあたり、空き家の活用についてはどのように考えるべきか。

#### 〈委員〉

- ・空き家は地域の宝という捉え方をしている。今はそれをいかに拾い上げるかという作業をしているところである。
- ・特に最近では、町外の事業者が、県の補助等を使って、100年以上の古民家をコワーキングスペースやサテライトオフィスなど新しい働き方の場所として改修するケースや、一棟貸しのゲストハウスに改修するケースがある。
- ・駅の利用促進という観点からの空き家活用もある。空き家は消防法の関係で宿泊施設にするのはなかなか難しいが、駅を利用して来た人を対象に研修施設として使っているケースがある。空き家はいろんな形で使い道がある。

#### 〈委員〉

- ・古民家を宿泊施設等として活用する取組は非常に有効だと思う。ただ、それをやるにあたっては、専門の業者と連携しながらやっていかないといけない。
- ・いずれにしろ、空き家を有効に活用して、そこに人が来て宿泊したりすることで、関係人口との濃度、密度、その場所を好きになってもらう度合いは高まるはずなので、積極的に進めていくべきだと思う。

#### 〈委員〉

- ・空き家は放置されることが一番問題になる。利用価値のあるものは、これからもどんどん利用され、行政のサポートももっといろいろなチャンネルが出てくると思う。放置される住宅の方が今後、大きな問題になってくると思う。
- ・これからの若い人たちには、例えば週末だけ家島で過ごすといった住宅の活用がどんどん増えてくる傾向にあると感じる。
- ・空き家問題は田舎だけの問題ではなく、都市部ではもっと問題が大きくなると感じている。隣との密接の問題で放置された場合にどうするのかという点で、田舎よりももっと大きな問題になるので、田舎の方が利用しやすいだろう。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・価値があってストック活用できるものは放っておいても面白いことをする人たちがどんどん利用する。
- ・恐ろしいのは、中山間地域や都市部に大量に余る程度が悪い民家・空き家。個人的な意見としては、それらを壊すことの何が悪いのかと思う。2050年の社会がどうなっているか分からないが、価値がなく誰も使わないのであれば、むしろ発想を変えて、壊すことを一つのビジネスにすることも結構なことだと思う。空き家を壊すことでストレス発散したり、空き家でサバイバルゲームをしたりするビジネスが生まれれば、空き家の利用自体の意味合いが変わってくる。
- ・空き家の利活用が大前提になってしまうと話が進まない。中山間地域では集落ごと放棄されているところもあるので、そこで新たなビジネスを生むことを考

えた方が、2050年にとっては生産的な議論かと思う。それがビジネスとして成立して、しかも地域にとってお金になればいい話である。

- ・要するに、経済的価値も利用価値もないような空き家が増えたときは、発想を変える必要があるのではないかと思う。

#### 〈事務局〉

- ・集落と関係人口の関わり方として、農業や自然体験、散歩、サイクリング等が挙げられたが、これら以外にも関わり方のパターンはあるか。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・サイクリングはコロナ禍で注目されており、行政としてもサイクリングロードを作ったりしているので、サイクリングスポットとして集落や地域を紹介することはwin-winだと思う。
- ・少し小さめでも構わないのでサイクルステーションもどきなものをモデル的に集落の中に整備してはどうか。普通は公共施設の中やドライブイン的なところに整備されるが、違うパターンがあってもいいのではないか。今までと違う場所性が、銀の馬車道など全体のストーリーとしては好ましいかもしれない。

#### 〈委員〉

- ・関係人口を増やす上で、地域の受け入れ側の体制については、自治会のリーダーによって左右される。
- ・結局、自治会など地域における中間組織が緩やかにどれだけリーダーシップをとって取りまとめていけるかだと思う。
- ・今後、人口が減っていく中で地域コミュニティが担わないといけないものはたくさんある。行政から与えられている自治会の仕事は莫大な量で、2～3人の役員で全部請け負うことは無理である。スクラップ&ビルドしないといけない。
- ・地域においてSNSが全然活用されていない。自治会の中でどうやって情報共有をして物事を進めていくかという仕組みづくりも今後の大きな課題

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・行政と住民の間にポジショニングするコーディネーター人材は、ある程度プロフェッショナルな人でないと担えるレベルではない。その仕事で食べていける（職業として成立する）プロフェッショナルな人を配置する必要がある。こうした中間組織をリスペクトし、投資をすることが社会にとって好ましい。
- ・地域における情報共有については、現状は全くデジタルの世界ではない。代替わりの難しさと担い手の問題もあるので、一朝一夕にデジタルな世界が進むとは思わないが、2050年を考えると、コーディネーター的役割の人か行政によって、情報の整備は進めていかざるを得ない。
- ・地域に任せる部分と地域ではもうできない部分は明確化されているので、その取捨選択を的確にする意味でも、コーディネーターがますます重要になる。

#### 〈委員〉

- ・観光においても、地域資源の見直し等を行うには、外部やプロの視点は非常に重要である。都市部での活動経験のある外部人材に入ってもらうのが一番良い形であるが、そうした人を引っ張ってくるにはそれ相応の対価が必要となる。

- ・コーディネーターに対するお金の問題は、それぞれの地域に任せるのではなく、行政による仕組みづくりが必要だと思う。

#### 〈委員〉

- ・行政、とくに町役場からの意見としては、マンパワー不足のため、役場の職員が地域のコーディネートを行うことは難しい。特に山間部の行政組織においては顕著であるため、県との連携によりスクラムを組むしかないかと思う。
- ・中播磨地域における関係人口の創出に向けて、人と人とのつながりを作るのに、新たなシステムを作るのもいいが、ひょうごe-県民制度がうまく動いているのであれば、活用できないかと思っている。

#### 〈委員〉

- ・団体そのものを変えたり無くしたりというのはなかなか難しいが、既存の団体の運営方法を変えていくことは行政側にも出来る範囲のことではないか。運営の形だけ変えていけば、ある程度のことには対応できるのではないかと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・いろんな物事は最終的には人材をどうやって育てるかということに行き着く。地域で担い手を育てていくことの必要性を理解した上で、プロフェッショナルな人材のもとで修行するような「育てる我慢」も必要ではないか。全部が外に流れてしまうと、その地域に何も残らないので、うまくプロフェッショナル人材のところへ地域の人たちが入っていくことで、「人」を残すということが最終的には重要である。当たり前の話であるが、最後は「人」だと思う。

(以上)

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第2回産業部会 議事概要 (検討テーマ：次世代にとって魅力的な産業システムの再構築)

### ■ゲストスピーカーによる話題提供

#### ○AI・IoT・ビッグデータがもたらす30年後の未来

##### 《説明要旨》

- ・AIの補助によって、様々な仕事の難易度を下げることができる。
- ・農業、漁業に関しては、これまで勘や経験に頼っていた部分を、データ活用することで、誰でも同等の作業ができるようになり、単純労働はAIやロボットを活用することで自動化あるいは半自動化が可能になってきている。
- ・2000年の初め(約20年前)に開発された地球シミュレーターと、最新のゲーム機(プレイステーション5)の計算能力はほぼ同じである。スーパーコンピュータ「富岳」は現在、世界トップの性能であるが、30年後には今の富岳レベルの計算が手元のスマートフォンでもできるようになることが予想される。
- ・ビッグデータで大量のデータが集まってきているが、それを収めるストレージもどんどん安く大量のデータを扱えるようになってきており、処理をするコンピュータもどんどん高性能になってきている。
- ・30年後、仕事がどのようにシフトしているかを考えると、どの層においても、AIやビッグデータ、ロボットが補助することにより、今の仕事の一段階上のレベルを担当できるようになることが予測される。
- ・現在の予測では30年後に日本の労働人口は30%減ると言われており、これをAI・IoT・ロボットの活用によって、穴埋めしていかないといけない。
- ・現状の単純労働・単純作業は、AI・ロボットを使った自動化がこれから進んでいく。そのために個々の要素技術の一つずつ開発していくことがこれから必要
- ・熟練や勘と経験が必要な仕事を、誰にでもできる仕事に変えていくためには、今ある勘と経験を蓄積し、誰もが使える形に翻訳する必要がある。
- ・要素技術の開発に必要な現場の協力を得るためには、行政の支援が必要

##### 《質疑等》

##### 〈委員〉

- ・先端技術の活用が人手不足の対策に繋がるとのことだが、逆に人の仕事を奪ってしまう怖さも感じる。技術の側面から見て、どのように感じているか。

##### 〈ゲストスピーカー〉

- ・そういったことが特定の分野で進むのは間違いないが、誰でもできる簡単な仕事はAIに任せて、AIに任せきれないところを人がフォローしていくという流れがあらゆる分野で進んでいくと思う。
- ・完全に人手がゼロになる分野はほとんどなく、やはり人が最後は面倒を見ないといけない部分がどの分野でも必ず残ってくる。いきなりゼロになることはないが、徐々に減っていく。その減っていくスピードは、現在の人手不足や後継者不足の問題とちょうど釣り合ってくるのではないかと期待している。

##### 〈委員〉

- ・スマート農業に関しては、ドローンの解析も各地で始まっており、今はデータを集めている状況かと思う。無人トラクターは今のところかなりコストが高い

が、今後、生産台数が増えるとコストも落ちてくるのではないかと考えている。

- ・スマート農業によって、勘と経験に頼らず誰でも生産できるようになる中で、農業生産販売の部分と、趣味としての農業は分けて考えないといけない。AIが発達すればするほど、手作業で作物を育てる感覚を大事にする人が、逆にすごく増えてくると思う。
- ・AIにより農業生産はすごく効率的になるが、味や収量など全体的な農産物が、良い意味でも悪い意味でも一定化すると思う。今後の農業経営を考えると、一定化とは違う、付加価値をつけた農作物を作っていく必要がある。その部分において機械でできることをあえて手作業で行う趣味の農業、いわゆる人と人との繋がりという部分での農業が大事になる。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・趣味の農業においても、水やりや草抜きなど普段の世話をリモートでロボットに任せて、一番の喜びである収穫を人が現地で行う方法も考えられる。すべてをAIやロボットに任せるのではなく、人間がやりにくいところ、できないところから率先してAIやロボットにやってもらうのがいいのではないかと。

#### 〈委員〉

- ・漁業も高齢化が進み、人手が少なくなる中、効率化が重要になってくるが、やはり極めつけは人間である。細かな部分は人間の手が必要であり、漁業の全部がAIや機械だけにどっぷり浸かることはないと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・現時点で100%自動化することは無理であり、AIができるのは90~95%まで。AIが分からないことをいかに人間がフォローするかが大事である。現状のAIは人間のフォローが必要であり、時代が進んでも完全には行き着かないと思う。いかに人がフォローしていくか、なおかついかに人の作業を減らせるかという観点で、AIにさせることを探していくことが大事である。

#### 〈委員〉

- ・AIの導入により漁業の現場は大きく変わると思う。効率化され便利になると魚を獲り尽くしてしまう恐れがあるので、漁獲制限をかける必要がある。
- ・高齢化が進み、漁業者数が減ってくると、どうしてもAIに頼らざるを得ない。
- ・効率化すると同時に、ちゃんと資源を残しておいて、持続的に操業することが非常に大事だと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・現状は、漁に出ても必ずしも魚が獲れるとは限らず、空振りになる回は避けられないが、ドローン等の活用により外れる確率は随分減らせると思う。AIやドローンにより、そういった意味での漁の効率化が期待できる。すべての漁船が行くと獲りすぎになってしまうので、逆にその分、漁船の数は減っていき、一隻が常に安定した漁獲を得られるようになるのではないかと考えている。

#### 〈委員〉

- ・AI・IoTの導入に関しては工業が一番進んでいると思う。
- ・今後、日本の人口は間違いなく減る。そんな中でAIやロボットに頼る風潮やトレンドになっていることは逆に良いチャンスだと思う。例えばコンビニは今後、無人店舗になるなどロボット化されると思うが、すべての仕事がそうなる

わけではない。そういう点で言うと、先進国の中では逆に人間の本当の価値というのが非常に重要になってくると思う。また、そういった人たちに対する教育は大事になる。

- ・人口の減少を、外国人等の活用により穴埋めすることばかりを考えるのではなく、仕事の質を変えることに着眼することが大事だと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・AI やロボットの導入は、いろんなことにトライしてノウハウを積み重ねていって一般化していくことがこれからの流れ。同じ失敗を繰り返すことが一番無駄なので、うまくいった事例だけでなく、失敗した事例もちゃんと集めて、より効率的に開発できるようになればいいと考えている。

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域は工業が発展・集積している地域であるが、今後、全国的・全世界的にスマート農業、スマート漁業のニーズが高まっていく中で、それらを支える技術やシステムを開発していくポテンシャルはあるのだろうか。

#### 〈委員〉

- ・確かに製造品出荷額等は非常に高く、日本の中で成功はしていると思うが、レベルとしてはかなり低いと思う。
- ・それで絶望ということではなく、使えるものも結構ある。県立大学や理化学研究所、高輝度光科学研究センター、ものづくり大学校等の施設・インフラ（ハード）に加え、大学の先生方や研究者との交流・連携（ソフト）などポテンシャルは高いので、その点を企業が認識して活用することがキーポイントになる。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・大学があるだけではハードルが高く連携が難しいので、それを仲立ちするような相談窓口が大事である。

#### 〈委員〉

- ・新技術の導入は自社の競争力を高めるといふ競争の面がある。競争という部分と、みんなの知識の蓄積・共有という部分がうまくかみ合えばよく、それは行政や大学の役割であるかと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・公共サービス、公的セクターにおける AI の導入については、行政が持つ健康診断データの解析を行っているが、効果を上げるためには、行政側もいろんなデータを出す必要がある。

## ■意見交換

### ①先端技術の活用

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域は広いが、私の住む夢前町は山合になり、田んぼ1枚が小さい。トラクターが入るのに、田んぼが小さいと効率が悪いので、大きくしていくという方向性が必要になる。
- ・これから担い手が減ってくると農地が余るのは目に見えている。そのときスマート農業を活用して一人あたりの耕作面積を増やしていかないと、耕作放棄地、放棄田が増えて、田畑が荒れることは目に見えている。それを防ぐためには、

獣害対策と農地の拡大が大事だと思う。

〈委員〉

- ・漁業は AI の導入がかなり遅れている。常に自然界を相手にしているので、漁業は生活が不安定である。今の若者はお金儲けもさることながら、休みが大事である。休みが楽しみであり、休みがあってこそ初めて仕事に力が注げるといふ人が多い。そういう時代になってきているので、これからの漁業は必ず決まった休みを作り、余裕を持って仕事ができる環境づくりをしないといけない。漁業は厳しいと敬遠され、後継者が不足しているので、AI 導入等をはじめ、環境改善に向けた勉強をしないといけないと考えている。

〈委員〉

- ・安定的で余裕のある暮らしが送れることは、これからの時代は大事である。利益や人手の補完というだけでなく、もう少し余裕のある暮らしをするために、IoT をどう活用するかという視点が重要だと思う。

〈ゲストスピーカー〉

- ・農業でも漁業でも AI を活用して効率を上げる際に注意が必要なのは、AI をいち早く導入した人が利益を独占しない仕組みづくりである。
- ・みんなの効率が上がり、みんなが土日休める働き方になっても、従来どおりの漁獲量が得られるようになるのが理想であり、それはやはり行政がコントロールしないといけない。いち早く先んじて導入した人だけが莫大な利益を得て、他の導入しなかった人にその分のしわ寄せがいくことが十分に考えられるので、AI 導入にあたっては注意が必要である。

〈委員〉

- ・最近よく言われている SDGs とリンクさせた施策を持たないといけない。効率を考えると獲りすぎることになるが、やはりそこにはこれからの時代に合わせた社会倫理のようなものを作る必要が絶対にあると思う。先端も大事だが、その先端に倫理観がどう並行していくかという点に興味がある。
- ・金物の町である新潟県の燕三条では、年 1 回「燕三条 工場の祭典」というイベントを開催している。先端的なインフォメーションもしながら、機械と人間にしかできない見せ方をしており、工業、農業、漁業など資源が豊富な播磨だったら同じことができるのではないかと感じた。

〈委員〉

- ・AI 活用の取組は、一つの会社・部門ではハードルが高いが、複合化・連携化することによって、それぞれ活用・共用でき、コストも下がる。反対に効果も何倍かに上がり、持続可能なプラットフォームが構築できる気がする。
- ・中播磨の特徴は、北から南まですべての要素を持っているところであり、工業・農業・水産業のそれぞれの強みを掛け合わせることができれば、中播磨の魅力になると思う。

〈委員〉

- ・先端技術の活用に関しては、導入するのはいいが倫理観や余裕ある生活等を意識した形が最終的にめざすべき姿かと思う。
- ・そのためには、効率や利益だけを重視しすぎることなく、倫理観等の側面を見据えながら取り組んでいくことが方向性になるのではないかと感じる。



## ②産業間連携

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・地域に根ざした6次産業化ということになると、いかに地域の特色を出していくか、いかに情報発信を行うかという点が大事になると思う。

### 〈委員〉

- ・農業の6次化も、各地区でいろんなものがどんどん出てきているが、似通ったものが多い印象である。
- ・夢前町で夢街道というグループがあり、我々農家や旅館、酒蔵、肉屋、かまぼこ屋などが連携して何かできないかと動いているが、結果が数字に出てくるのはなかなか難しいとつくづく感じている。
- ・私は酒米を作って酒蔵と酒づくりをしているが、それだけならどこでもあるので、100年前にこの地域で作られていた品種を復活させて地元の酒蔵で仕込む取組を行っている。産業、工業、農業が連携するにあたり、ここだけのオンリーワンの連携でないと魅力がないと思う。農業も米も酒もどこでもあるので、特色あるものである必要がある。最先端のものと手作業を組み合わせることが、連携には大事なのではないかと考えている。

### 〈委員〉

- ・地域の特色を出していかないと差別化できない。そういう中で、歴史的なものや、もともとこの地域にあったものをしっかり活用していく視点は非常に重要である。それをうまくブランディングし発信していくことで、産業間連携を進めていければいいと思う。

## ③チャレンジできる環境づくり

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・スタートアップ支援については、どの企業も新しいことを始めるにあたって、自己資金で全部やることは無理なので、外部の資金を入れてやっていくことが大事になる。その際、いきなり大学に相談するのはハードルが高いと思うので、そこを支援・コーディネートしてくれる存在が必要になる。
- ・人材育成に関しては、今、大学は全入学生にAI教育を始めようとしている。AIの活用で大変なのは、いかにデータを集めて、いかにそれをAIに食わすかというところで、それについての教育がようやく始まろうとしている。
- ・30年後は、AIの使い方を学んだ人材はどんどん育ってくるので、AIを活用するにあたって一番最初のハードルはいかにデータを集めるかということになる。将来何かAIを使ってみたいと思ったら、まずデータ集めからすることが大事であり、AI開発以前にいかにAIに食わせるデータを集めるかというところをサポートする仕組みがあればいいと思う。
- ・行政データについても、個人情報等に配慮しつつ出せるデータはどんどん出してもらいたい。やはりデータの種類や量が多いほどAIは良い結果を出せる。データを集めやすくする、あるいは集めるために何が重要かというところを、人材育成していくことがこれから必要になる。

#### 〈委員〉

- ・新しいことを始めたり、人材を育成したりすることは、最初は赤字になるのは当たり前なので、そこを行政やみんなの力で支えることが大事。予算やデータ等の公共財をうまく活用していくことと、プラットフォームのような出会いの場づくりが目指すべき姿・方向性かと思う。
- ・若者はあまりにもリスクが高いものは引き受けられない。そうした生活も含めて支えていける中播磨であってほしい。

#### ④儲かる第一次産業

##### 〈委員〉

- ・漁業の現状について、環境の変化などいろんな要素があって、魚の漁獲量がすごく減ってきている。自然界を相手にできた魚は、自然がどんどん変化している中で、今後もあまり期待できない。
- ・牡蠣やノリ、イワシなどの「育てる漁業」は生き延びている。自然界に出て行って獲る漁業ではなく、養殖が強くなっている。やはり今後、安定した収入を得るには、養殖しかないのではないかと思う。
- ・室津は一時期漁業が衰退していたが、数年前から牡蠣養殖がすごく儲かるようになったため、都会で働いている若者が帰ってきて漁業者が増えている。坊勢もこうした方針に転換していかないといけないのではないかと感じている。

##### 〈委員〉

- ・地域の農地を守りながら、経営が続けられる農業が一番の理想。そのためには、やはり効率を良くして、作付面積を増やしていくことが絶対に必要である。
- ・それとは別に、魅力ある農業であることが大事である。労力の軽減と、休みの確保が効率化により賄えるのであれば、魅力的な仕事なので、農地を守りながら特化した農業を見せて、売っていくことは大事だと思う。
- ・牡蠣の養殖について、オイスターシスターズという20~30代の3人の女性が、お洒落な格好をして牡蠣を育てている。そういう人たちが発信していたら食べたいと思い、実際に食べに行ったら美味しかったら顧客ではなくファンに繋がっていく。こうした見せ方も大事だと思う。

##### 〈委員〉

- ・テーマが「儲かる第一次産業」という言い方になっているが、「儲かる」というのを目標にしすぎるのもまずいと感じた。儲かることと効率化も大事だが、魅力や、やること・関わるのが楽しい・面白いと思えるもの、あるいは土日きちんと休める余裕のある安定した暮らしができる第一次産業が、これからめざすべき姿・方向性ではないかと感じた。

##### 〈委員〉

- ・農業でも漁業でもよく都会から小学生が観光に来るが、見るだけではなく、体験してもらったらどうかと思う。一步踏み込んで体験してもらうことで魅力が増すのではないかと思う。

(以上)

**中播磨新地域ビジョン検討委員会第3回産業部会 議事概要**  
(検討テーマ：環境保全、産業・働き方の魅力発信と人材育成・誘致システム)

■ゲストスピーカーによる話題提供

○環境保全

《説明要旨》

- ・2050年に向けて、中播磨の人と自然の共生を考えるときに、地球温暖化という視点が、非常に大きな影響を持つ。気温・海水温、異常気象・災害、海洋の酸性化など非常に大きな環境変化が起きている。
- ・特に環境保全において、自然生態系については、温度が上がることにより、植物や動物の住む環境が変わり、今まで存在できた生物が消えていき、新たな生物が出てくるのが非常に懸念されている。
- ・二酸化炭素の増加で温暖化が進むと、植物にも影響があるため、農業においても品種を変えないと稲作ができないなどの問題が現実になってきている。また、様々な畜産や果樹関係、森林でもそういった問題が起きてくる。
- ・これまで炭素の排出を減らそうとする「低炭素」の取組が進められてきたが、今後は「脱炭素」を強く進める必要がある。
- ・企業が自ら電力を100%再生可能エネルギーにするRE100という国際的な取組が進められつつある。
- ・2050年は、脱炭素をどう中播磨で進めていくのかということが大きな課題
- ・炭素を減らそうとすると、一方で環境保全の面で問題が出てくるといった諸刃の剣のような影響（例：山を削り太陽光発電をすることでCO<sub>2</sub>の削減は図れるが、森林が破壊され、土砂流出の危険性が高まる）が多くある。両方を上手く調和させることが今後の課題
- ・人間と生態系を切り離して説明されることが多いが、人間も生物であり、生物が増えたり減ったりすることにより、自然は非常に大きく変わる（人間の増加によりゴミや廃棄物は増え、人間の減少により里山の管理は困難に）
- ・里山を支えるボランティアの団体数や人数は、飽和状態であり、どちらかというとも減少気味。ボランティア頼みだけでは、環境保全も解決は難しい。
- ・30年後に社会の中心となる今の子ども世代が環境問題に対してどう意識を持つか、学んでいくかが非常に重要であるため、環境学習は重要

《質疑等》

〈委員〉

- ・脱炭素に向かうなかでCO<sub>2</sub>を排出してしまう現状は、農業も同じ。
- ・農家が使う大きいトラクターやコンバインは、現状でガソリンエンジンやディーゼルエンジンばかりのため、環境のことを考えるとあまり良いと言えない。

〈委員〉

- ・漁業では、既に海水の温暖化が始まっており、20~30年前にいたシャコやアナゴ、イカナゴ等がいなくなる一方で、かつていなかった沖縄にいるような魚が少しずつ見られるようになっている。

- ・自然の魚ではなく、人間が管理できる養殖関係は、多少水温が高くても品種改良を行うことで対応可能
- ・漁獲量の減少に伴い、事業規模が縮小され、漁業者の人口は減少し漁業は衰退

〈委員〉

- ・山肌をいびつな形で太陽光パネルが占めており、災害とエネルギーがぶつかり合っている。考え方を整理の上、最低限必要な倫理観の啓蒙や教育が必要

〈委員〉

- ・再生可能エネルギーと環境保全は諸刃の剣という話があったが、どちらかが犠牲になることは持続可能と言えるか。それともどちらかのロスが少なくなるようにして達成することが持続可能となるのか。

〈ゲストスピーカー〉

- ・環境はバランスのなかで成り立っており、様々な選択肢のなかで、どのような組み合わせが人も含めた環境に対して良いかということを考えていくことが大事（厳しすぎる規制など極端な対応をすると、環境はバランスを失う）

■意見交換①

○環境保全

〈ゲストスピーカー〉

- ・環境保全を考えると、30年後に望ましい環境は何か、30年後までその環境を保全したいかどうかをきちんと整理する必要がある（現状の環境が悪いのであれば改善する必要があるかもしれない。温暖化が進むのであれば、それに対応できる自然環境をつくる必要があるかもしれない）
- ・戻したり保全したりしながら、人間が自然環境の良さを体験する場は必要

〈委員〉

- ・環境分野は目標設定が難しいが、様々な状況の変化に適応できるよう、できることから進めていくことが大事

〈委員〉

- ・2050年を想像すると、農業においても実際に田んぼで米が作られているかどうか分からない環境になっているかもしれない。
- ・温暖化で生物が変わってきている一方で、鹿や猪などの害獣も含めた野生生物もゼロにするのではなく、ある程度共存できるようにすることが必要
- ・田んぼが持っているダムの役割なども今後は大事になると思う。

〈委員〉

- ・温暖化の傾向にどう適応していくかについて、温暖化を緩和させる方法と、温暖化を前提として適応する方法の2通りの考え方がある。

〈委員〉

- ・温暖化による米の品質の低下に対し、高温に強い品種への改良が行われている。
- ・全てハウスのなかで育てて水や温度の管理ができれば良いが、そういうわけにもいかないため、品種改良や、天候を予測する栽培管理等により対応
- ・フードロスが農業に直接的に関わってくる問題。食物残渣で作った堆肥等の活用が、ビジネスとして徐々に進みつつある。

### 〈委員〉

- ・漁業においては、海の底を耕すことが、次の魚を呼ぶことに繋がり、栄養に連鎖していく。
- ・人間が海を綺麗にしようとして、浄化した栄養のない綺麗な水を海に流した結果、30～40年の間に海の生態系が変わり、海の栄養がなくなってしまった。海を綺麗にしようとする環境保全が漁業にとって一番の課題になる。
- ・フードロスについては、かつては魚屋で訳ありの魚が売れていたが、今は店先には正規の魚しか並べることができず、訳ありの魚は市場に出せないため、多くのロスが生じている。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・環境汚染物質については規制していく必要があるが、窒素やリン等は栄養塩であり、その名のとおり栄養である。
- ・人間も栄養を摂り過ぎると肥満や成人病の原因になるように、地球環境にとっても栄養を取り過ぎたり出し過ぎたりすることは問題。海は綺麗な海ではなく、栄養塩が適正に供給されている「豊かな海」を目指すべき。

### 〈委員〉

- ・「豊かな海」と「豊かな自然」は30年後に目指すべき将来像のキーワードになる。

### 〈委員〉

- ・金属加工において、金属を削る機械は油を使用するため CO<sub>2</sub> を排出するが、油の量が少ないものに切り替えるような地道な取組は行っている。
- ・姫路市では従業員規模が30人以上の企業では、そのような意識が高まっていると思う。小規模企業にアプローチをしていくことが削減に向けた一つの方策
- ・中播磨における環境産業は、特別遅れてもいないが進んでもいないため、意識を持てば伸びるポテンシャルは十分あると思う。環境保全の発想やシステムを一つのモデルにして、ビジネス化されるかもしれない。

### 〈委員〉

- ・フードロスをどう事業化するかというところで、工業と農業の連携に期待

### 〈委員〉

- ・環境保全は非常に長い期間がかかる取組であるため、子どものうちから環境の大切さを刷り込むことが重要
- ・比較的豊かな環境である中播磨において、完全な形でなくても良いので、ICTや高齢者・若者・移住者等を活用しながら、トライ&エラーができるような環境保全のビジネスができれば良い。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・持続可能にするためには、環境だけを切り離して保全することはあり得ない。人間も自然のなかの生き物の一つであり、共生をどのように捉えるか。
- ・時代が変われば意識も変わり 2050年がどのような意識になるか分からないが、私は豊かな自然は人間が生きるために必要なものであり、人と自然との関わりは必要だと思う。

### 〈委員〉

- ・2050年に目指す姿のキーワードとしては、「清潔な自然」よりも「豊かな自然」

という言い方が正しいと思う。

- ・それに向かって、それぞれのセクターができることをしていくことが重要であり、農業と工業の連携も考えられる。
- ・中播磨の持っている産業のポテンシャルを、豊かな環境を目指すうえで生かし、他の地域の環境保全に貢献できるような産業システムをつくっていくシナリオを考えることができる。

## ■意見交換②

### ○産業・働き方の魅力発信と人材育成・誘致システム

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域でフリーランスがどこまで根づいていくか考えたとき、副業的な活用が現実的な方向性だと思う。国や自治体で大きな枠組みとして制度化していくと、よりトライしやすい環境になっていくのではないか。
- ・外国人は、いかに地域コミュニティが受け入れることができるかが一番のポイント。外国人とともに地域を育てるような取組が何かできればと思う。

#### 〈委員〉

- ・古い世代の人は必死に働くことやリスクをとって新しいことをすることを美德としていたが、これからの若い人は安定した生活がなければリスクをとらない。
- ・余裕のある暮らしや働き方ができることが産業の魅力にもなる。介護や子育てと両立できるような働き方をどう模索していくかが重要である。

#### 〈委員〉

- ・当社では、早い段階から外国人採用を実施しており、オーストラリアやアメリカ、マレーシアなど様々な国の人を採用してきた。
- ・外国人従業員とは、どのようにしてコミュニケーションをとるかが一番重要である。コミュニケーションは相手のことを一方的に理解するだけではなく、こちらの考え方やミッションを共有することが大事
- ・今後、人口減少は避けられないが、減った分を外国人で補うという意味ではなく、海外の人と接することでダイバーシティや多様な働き方などいろんな気づきがあるので、外国人の雇用は大事
- ・外国人実習生は定型的な仕事には向いているが、試作開発のようにチャレンジする仕事には向いていないと感じたため、現在は採用していない。能力や向き・不向きのタイプ等もあるので、正社員と実習生の使い分けは必要

#### 〈委員〉

- ・5～6年続けていると慣れてくるが、新しい人の方が素直で使いやすいという船主の意見があり、外国人実習生は3年交代で迎え入れている。
- ・外国人実習生は様々な問題があり苦労もあるが、実習生なしということは考えられないため、徐々に解決していく必要がある。
- ・日本人でも若い漁業者には、やる気を疑うような人もいる。ハングリー精神に欠け、もの足りなく感じるが、これも時代の流れなのかと思っている。
- ・若者のニーズに応えるため、週休2日制を導入し、余裕のある仕事の仕方を目指している。

### 〈委員〉

- ・若者は未熟な部分もあるため、週休2日を用意したからその分働かなければいけないといったことを、上手く伝えていくことが大事だと思う。
- ・若い人のニーズも聞きつつ、産業として成り立たせる必要がある。

### 〈委員〉

- ・漁業と同様、天候の関係もあり、農業で余裕のある働き方は難しい部分もある。
- ・スマート農業などを活用して効率化を図り、週休2日の導入など、農業分野でもこれからは最低限のラインは守っていく必要があると思う。
- ・農業の体験では、収穫体験のような簡単なものだけでなく、もう少し深い体験を入り口にして、多様な農業の推進を図っていく必要がある。
- ・若者は、農業の起業やビジネスの部分で新しい人を増やしていくことが必要
- ・高齢者は、お金にはならないが、家庭菜園などの「やりがい」の農業がこれから大事になる。今後、人生100年時代を迎えるにあたり、定年後に始めるやりがいとしての農業、ちょっとした生活の糧になる農業も必要だと思う。
- ・大規模化・効率化した儲かるビジネスとしての農業と、やりがい農業の組み合わせもあり得ると思う。例えば販売が得意な人には斡旋の仕事、高齢者には袋詰めの手伝ってもらするなど、上手い組み合わせでその人のやりがいづくりに繋がる可能性はあると思う。
- ・子育て世代のフルタイムで働くことができない人にも、幼稚園のお迎えまでの間などのパートタイムで関わってもらえると思う。

### 〈委員〉

- ・農業も工業も、全員がフルタイムで儲かるビジネスをする組織体だけが存在し、競争しているところがあるが、今後はもっと選択肢を増やしていき、そのなかで組み合わせを考えていくことが大事
- ・体験なども含めて、産業の中でも様々なバリエーションをつくりながら、組み合わせていくような姿が望ましく、それに伴い働き方も多様になってくる。
- ・外国人にとっても、高学歴を得て稼いでいきたい人や、出稼ぎのような人もいるため、両方の受け皿があることは良い。

### 〈委員〉

- ・採用した外国人労働者と関わっているなかで、仕事を与えたときに、どういう部分でモチベーションが上がるかを観察したことが、今に生きている。
- ・先頭に立つ経営者はハードに情熱を持って仕事をし、そういう人間が今のバランスのとれた働き方を認めていくことが大事だと思う。

### 〈委員〉

- ・世代が変わり、若い世代に渡していく際に、普通に安心して暮らせる状況を用意することは大事であり、そういうふうに組織や事業を変えていくことが必要
- ・様々な選択肢が出てきているなかで、望む働き方と仕事をマッチングする情報センターのような組織やネットワークが、多様性が高まるなかでは必要（その役割を行政が担うのか、それともそれ自体をビジネスにして民間が担うのか）
- ・様々な働き方が出てくるなかで、今後、多様な関わり方ができていくと思う。

(以上)

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第2回暮らし部会 議事概要

(検討テーマ：健康づくり・地域福祉)

### ■ゲストスピーカーからの話題提供

#### ○健康づくりと医療確保

##### 《説明要旨》

##### ◆心と体の健康づくり

- ・将来的に社会・経済・心理的要因が私たちの健康に大きく影響を及ぼすと予測されている。
- ・アメリカは先進国で唯一寿命が短くなっており、高齢者ではなく中年層の寿命が短くなっている。その背景には、薬物依存、アルコール依存等の社会・経済・心理的要因があるという指摘がある。
- ・生活習慣である食事では、「粗食」から「飽食」へ変化しており、昔は見た目や味が悪くても栄養があるから食べていたが、今では肥満を気にして「栄養があるから食べない」という人もいる。また、食べ不足は自覚できるが、食べ過ぎは自覚できないため、好きな物があると食べ過ぎてしまうこともある。
- ・高齢者に限定されるが、やや太っていることが健康に良いことがわかってきた。
- ・食事は、栄養価が高く、タンパク質がとれるものが重要視されている。
- ・BMIは22が最も良いとされているが、決して死亡率が最も低いわけではない。ややBMIが高い人の方が死亡率が低いというデータが出ている。
- ・栄養の指標になる総コレステロール値では、70歳以上の人限定で見ると、低い人が最も死亡率が高く、やや高い人が最も死亡率が低くなる。
- ・フレイルは健常な状態と要介護の状態の間を指す状態であり、意図しない原因による体重の減少や疲労感、歩行速度の低下、握力の低下、身体活動量の低下がその特徴。中年まではメタボ対策、60～70代以上はフレイル対策が必要
- ・そのままであれば要介護になるが、フレイルは認識することで、健常の状態に戻れるので、フレイルには気をつけるべき。
- ・ヘルスケア機器は、心肺機能が測れるアップルウォッチ等が医療機器として、日本でも認可されるなど、今後ますます開発、発展することが予想される。

##### ◆認知症対策の推進

- ・認知症が原因で要介護になる人が増加している。日本では、脳血管性認知症が多かったが、昨今では、女性はアルツハイマー型の認知症が増えてきており、レビー小体型認知症は男性の割合がやや高いと言われている（三大認知症）。
- ・2025年は高齢者の5人に1人が認知症の時代になると報告されている。これだけの人に発症してくるのであれば、生理的な変化（多くの人に訪れる変化）と捉えることも必要かもしれない。

##### ◆医療提供体制の充実

- ・病床数は地域格差(西高東低)があり、関東圏では今後、不足が予測されている。

##### ◆医療・介護人材の確保

- ・医療需要は地域差が存在し、過疎地においては2010年に既にピークを迎えたが、大都市においては2040年にピークを迎えると予測されている。



- ・医療行為が在宅で必要になるため、看護職の活用も進む。
- ・オンライン機器についても「近所で完結できる」効率化が今後ますます進む。

### 《質疑等》

#### 〈委員〉

- ・認知症は早期発見が難しく、地域によっては体制が十分に整っていないことが今後の課題である。
- ・心と体の健康づくりには定年後も元気に働き続けることが効果的。介護の現場では定年後の方にも担える仕事があるので、健康づくりが収入・就労の確保にも繋がるような仕組みが必要
- ・現在は人口の8人に1人が医療・介護・福祉に就労しているが、今後、高齢化が進むにあたり5人に1人ぐらいにならないと厳しいと思うので、介護人材確保の対策が急務

#### 〈委員〉

- ・医療・介護の人材確保が充実していければ、地域も変わっていくと思う。
- ・食生活を変えることは難しいが、こういった形で地域に浸透させるか、発信していくかが課題
- ・健康づくり分野へのICT・IoT等の活用には期待している。

#### 〈委員〉

- ・自分が健康だと考えている人は要介護状態になるリスクが低いと言われているため、そこが健康寿命の延伸に繋がると思う。

#### 〈委員〉

- ・社会・経済・心理的要因によりアメリカの寿命が短くなっているという話を聞き、中播磨はこのようなってはいけないと思った。
- ・BMIや総コレステロール値、将来の認知症割合等の話については、行政は情報発信に、県民は知識の習得に努める必要があると感じた。

## ■ゲストスピーカーからの話題提供

### ○地域包括システムを取り巻く諸課題と展望

#### 《説明要旨》

- ・中播磨地域の2065年の人口推計をみると、姫路市で3割減、福崎町で4割減、特に神河町と市川町は7割以上減少し、人口が3,000人前後となり自治体として厳しい状況になる。
- ・各機関を「地域」、「家族」、「公」に分類したときに、2006年の介護保険法改正以降は、「公」は財政の効率化を図ることに重点を置き、これまで社会化されてきたものが「地域」や「家族」に転嫁されてきている。一方で、それを受け止める「家族」は疲弊の限界に達しているため、今後「家族」で受け入れることは難しいと思う。そうすると「地域」になるが、5～10年先であれば、自治会等で受け止めることができるが、休眠資産を活用しない限りは早晚限界が来ると思う。
- ・地域包括ケアシステムの課題として、①制度欠陥への対応、②自立観の共有、③社会福祉法人の有効活用、④地域組織の再構築等、⑤医療・生活基盤の確保の5点を考えており、このうちの①と⑤は「公」で手立てを考える必要があり、②③④は「地域」に投げられている課題だと思う。

### ①制度欠陥への対応

- ・生活保護を除けば世帯を対象にした制度が全くなく、例えば 50 歳の障害のある人を 80 歳の親が支援している状況で、親が要介護状態になった時に救う制度や施設がない。こういった場合は、世帯を対象にした制度がなければ、複数のニーズがあるケースへの対応が難しい。

### ②自立観の共有

- ・様々な課題のベースになるのが、「自立」をどう考えるのか（自立観）であり、制度づくりや地域づくりの部分に影響を及ぼす。
- ・介護では、介護不要になることが自立と言われているが、あまりにも狭く偏っていると思う。障害では、介護の有無ではなく、自分の判断と決定により主体的に生きることが自立であるとされている。また、依存しないのではなく、依存先を施設や親以外にも広げ、何も頼っていないと錯覚させることが自立とされており、自立観が違う。
- ・自立観の共有なしに、地域での共生や包括を図ることは難しく、そうすると今の地域包括ケアシステムが高齢者中心・介護中心に展開している限り、地域を包括したシステムにはなり難いと思う。

### ③社会福祉法人の有効活用

- ・社会福祉法人は、半永久的に齢をとらない貴重な資源である。
- ・社会福祉法人の自助努力と行政による財政支援等により、せつかくの資産を活用しない手はない。

### ④地域組織の再構築等

- ・早晩限界を迎える現在の地域組織において活用できていない資源（休眠資源）は女性と障害者
- ・女性が地域で活躍できているところは多くないが、実際に地域で普段付き合っただけで動かしているのは女性であり、重要な位置を占めている。
- ・女性を軸にした地域展開や偏った価値観を持たれている障害者の活用を進めなければ、今の男性中心・健常者中心の自治会では、地域福祉は限界を迎える。

### ⑤医療・生活基盤の確保

- ・姫路市は公立病院がなくてもやっていけるが、姫路市以外の町では公立病院の役割がある。都市部以外では公立医療機関の役割を再検討して活用することが大事になる。
- ・医療機関に限らず、移動・買い物等の生活基盤の確保は重要。地域団体の意思を自治体が規制するとますます痩せ細っていくので、柔軟な対応が必要

### 《質疑等》

#### 〈委員〉

- ・医療機関や介護サービスを受ける事業所が姫路市中心部に集中しているので、神崎郡内での体制整備や通所手段の確保が必要

#### 〈委員〉

- ・人口が減少すると行政に携わる人口も減少するため、行政サービスも減少する。そうすると、地域のコミュニティや NPO 法人等が行政に代わるような仕事をしていくのではないかと思う。

- ・自立観の共有の依存先を広めることについて、人口が減少していくなかでも、地域でつながりを持つためには、リーダーになる人物を育てることが課題になる。

#### 〈委員〉

- ・地域包括ケアシステムについて、行政側も自治会や民生委員頼みの姿勢がある。
- ・要介護や要支援にならない健康づくりや体力づくりに重きを置いて、進めることが大切

#### 〈委員〉

- ・地域包括支援センターは介護保険や高齢者に限定されているため、現場からは障害との連携がなかなか難しいと聞いている。

## ■意見交換

### ○中播磨地域の現状と課題について

#### 〈委員〉

- ・健康づくりや体力づくりを普及させるためには、参加しようとしなない人に目を向ける必要があると思う。

#### 〈委員〉

- ・高齢者の体力測定会に参加したことがあるが、参加者は元気な高齢者が多い。ただ、参加していた元気な高齢者でも、1回活動に参加しなければ、その後引きこもってしまうことがある。

#### 〈委員〉

- ・人口は減少するが、高齢化率は上昇していくなかで、参加してもらうことが大前提であるため、自分の健康は自分で守るという意識を高めていくことが必要
- ・市川町では、特定健診の受診率を上げるために、AIを活用して、個人ごとに特定健診のデータを分析し、その人に適した案内文を作成して発送している。受診行動を促すため、中播磨地域内に広げていければと思う。

#### 〈委員〉

- ・内田教授と谷口教授に質問だが、高齢者の健康づくり教室等の会合への参加率はどのような推移になっているのか。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・10年前の70代の人と、今の70代の人とでは興味を持っているものが違う。またICTやIoT等においても、今の30代、40代の人たちの方が知識を持っているため、すんなり馴染みやすい。適切な答えは持っていないが、そのような世代差はあると思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・かつて介護予防教室への参加は圧倒的に女性が多かった。これは地域に根を張っていない男性が参加しにくかったからである。この状況を打破しようと、小野市は、持つのに力が必要な大きめの牌を使った麻雀を使用し、健康づくりをしながら、男性でも楽しめるメニューを開発するなど工夫をして、男性の参加を増やした。
- ・小学生の登下校時に見守りをすることは、高齢者が支援してもらえばかりでなく、自分も役に立っているという承認欲求を満たすことに繋がり、多少しんどくても頑張っ外に出ることを促す仕掛けづくりになる。

### 〈委員〉

- ・いきいき百歳体操の参加者は、姫路市は全国トップクラスを維持してきた。そこで認知症の早期発見や体力づくり、情報交換に繋がっていたが、昨年か一昨年ぐらいから実施団体が減ってきて開催が難しくなっている。
- ・自治会や地域包括支援センターが引き継いだり支援したりして、かろうじて継続している地域もあるが、残していくには行政との連携や支援が必要

### 〈委員〉

- ・前に参加した認知症カフェでは、お世話している人が後期高齢者で、後継者となる若い人の参加がなかった。
- ・無償でボランティアとなると新しい住民や若い人は率先・継続して行うことは難しい。また高齢者も遠慮があって頼みにくい。有償でのご近所ボランティアのような新しい形も一つのあり方かもしれない。

## ○目指すべき姿や方向性について

### 〈委員〉

- ・高齢者は生活環境の変化を嫌う人が多い。住み慣れた地域で生きがいを持って生活できることが幸せだと思うので、その環境づくりをすることが大切
- ・神崎郡では遠距離通所のための交通手段や、施設の選択肢の少なさが課題。こうした課題が解消され、将来安心して暮らせるビジョンを描くべき。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・人口減少下において、コンパクトシティという考え方を検討している自治体もある。コンパクトシティは間違いではないが、一方で消滅する地域を「看取る」という考え方がある。地域の活性化ばかりがキーワードになっているが、消滅する地域を全て維持することは難しいため、最後の一人が居なくなるまで学生等が寄り添い、地域の最後を「看取る」取組も行われている。
- ・地域が活着している間に、その風景を映像等で残してほしい。そうすることで、その地域は子どもの世代まで記憶として生き続ける。

### 〈委員〉

- ・コンパクトシティは賛成だが、一極集中により、無くなる村も出てくる。最後までそういった村に残りたい人のためにも、何ができるかを考える必要がある。
- ・目指すべき姿としては、地域コミュニティ等の依存先を増やすこと、もっともっとムラ社会に近づけること、そして女性の活躍の場を増やすことが大事

### 〈委員〉

- ・中播磨の誰もが、それぞれのライフステージにおいて心身ともに健康で活躍し、暮らしていることが目指すべき将来像だと思う。
- ・仕事や社会参加、社会貢献等において自分の能力を生かし、生きがいを持って暮らすことも誰もが望む将来像だと思う。
- ・人口減少下においても AI・IoT 等の先端技術の活用により健康な暮らしを実現していくことが取組の方向性だと思う。

### 〈委員〉

- ・目指す中播磨の姿は、健康づくりなど身体のケアをしながら、地域のなかで就労できていることが大切になると思う。

## ○事務局からゲストスピーカーへ質問

### 〈事務局〉

- ・30年後を考えたときに、ICTやAIが、個人の健康づくりに及ぼす影響は？

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ヘルスケア機器については、1日の活動のログを記録して適切な健康活動を提案してくれる等より一層発展・充実し、もっと便利で身近なものになると思う。
- ・健康の重要性でいうと、生活習慣よりも、これからの時代は社会・経済・心理的要因の影響を受ける。今後、単身世帯が増えてくると、ストレスが発散できず、これが病気の原因になってくる。生活習慣病の原因は、運動不足や食生活の乱れ等であるが、その「原因の原因」は心理的なストレスである。
- ・健康づくりの視点で考えるこれからの中播磨の姿としては、愚痴や日常の些細なことなどを共有できる人と人との繋がりが大事。今後、ICT等で情報はどんどん入ってくるが、誰かと共有できないと心の隙間が埋まらず、病気の原因になり、今のような健康状態や寿命を維持できるか心配

### 〈事務局〉

- ・地域包括ケアシステムを支えるための新たな組織のあり方について、現状のままでは早晚限界を迎えるとのことだが、30年後は破綻しているのか。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ICTでカバーできる分野は別として、対面で支援する必要がある分野がある以上は、物理的な距離の問題で限界を迎える地域が出てくる。それでも、そこで暮らしたいという場合には、看取るということも必要
- ・30年後を考えたとき、今、眠っている資源である女性が、働き手としてだけでなく意思決定も含めて中心になって活躍することが大事。世代交代により価値観も変わるため、30年後は自然と男女共同参画が実現できているかもしれない。
- ・社会福祉法人だけではなく地場産業も含めた、半永久的に齢をとらない地域の資源が活躍できる場をどれだけ用意できるかが重要

### 〈事務局〉

- ・中播磨地域では、社会福祉法人の数は十分に足りている状況なのか。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・厚生労働省の総量規制もあり、老人福祉施設は必ずしも足りている状況ではない。障害施設は、数は増やさず地域移行するという厚生労働省の方針で、今ある地域資源を最大限活用するしかないと思う。

### 〈陪席〉

- ・姫路市を含む4市町の介護保険事業計画の策定委員に参加しているが、そのなかではそこまで不足している状況ではないと認識している。
- ・神河町は、初めて要介護認定を受ける人の年齢が県下でも高く、健康寿命が長いことを自負していた。人口減少や高齢化は避けることができないなかで、健康寿命を延ばすことは一つの手段として有効ではないかと思う。

(以上)

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第3回暮らし部会 議事概要

(検討テーマ：子育て・教育、安全安心)

### ■ゲストスピーカーによる話題提供

#### ○教育に係る現状認識、問題提起

##### 《説明要旨》

- ・児童生徒数は減少の一途を辿っている。
- ・学校数も統廃合が進んでいるが一段落し、平成26年頃から鈍化（統廃合しても小規模校化が進む）
- ・適正規模を目指して進める統廃合にも限界がある。小規模校であっても、子どもたちの教育環境を充実させていくことに議論をシフトすべき。
- ・小規模校の価値（小規模校だからこそできることもたくさんある）
  - 小ささのメリット（機動性、相乗性、関係性の密度や多様性等）
  - コミュニティの核（人口流出のダムの機能を学校は果たしている。文科省も小規模校を存続させる市町村の選択を尊重）
  - 地域分散型社会の受け皿（地方移住者の受け皿として、小規模校であっても残しておくことが求められる）
- ・より速く、より高く、より強く→より楽しく、よりしなやかに、より末永く
- ・Education2030 (OECD) のゴールはウェルビーイング (well-being)、幸福
- ・より良い未来を創造するために必要な社会変革コンピテンシー
  - 新しい価値を創造する力（個々にではなく「共に」がポイント）
  - 緊張・ジレンマを調整する力
  - 責任ある行動をとる力
- ・社会に開かれた教育課程（学校を開くだけではなく、学校の中に地域も入っていき、共にどのような子どもたちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを、学校と住民が共有し、一体となって子どもたちを育てる）
  - コミュニティスクール、地域学校協働本部
  - 地域や保護者が関わることによって子どもたちの教育環境を充実させるとともに地域も活性化（学校も地域も win-win の関係）
- ・主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）⇔講義式の一斉授業
  - 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」に加えて「何ができるようになるか」
- ・中播磨地域では、子どもが地域行事に参加する機会が得られているのに、それが地域社会への関心に繋がっていない。
- ・地域行事への参加率が非常に高い強みを上手く生かしながら、郷土愛や地域への関心に繋げていく活動が重要

##### 《質疑等》

##### 〈委員〉

- ・主体的・対話的で深い学びを行うと、授業時間数が必然的に不足しないか。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・時間数は窮屈な状況だが、決められた時間内でアクティブラーニングを取り入れられるよう、学校現場は工夫している。今の一斉授業にアクティブラーニングをプラスするのではなく、学び方自体を通常の授業から変えていく。

#### 〈委員〉

- ・学校施設の老朽化が進み、維持管理が大変であるため、統合や小中一貫校等の検討もしていかないといけない状況である。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・縦の統廃合と言われる小中一貫は一つの方法
- ・財政面では統廃合が、必ずしもメリットがあるわけでないという試算もある。
- ・小規模校だからこそ豊かな教育が実践でき、若い移住者のダムの機能を果たす。

#### 〈委員〉

- ・都市部と農村部でコミュニティスクールの実践方法に違いはあるか。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・都市部でも農村部でも、コミュニティスクールの機能はあまり変わらない。
- ・従来は学校と地域との連携が十分にとれていた（昔は自分たちの学校だという意識で、地域住民が運動会や学芸会等の学校行事に関わっていた）が、それが上手くいかない地域では、コミュニティスクールのような器が必要になった。
- ・コミュニティスクールのように地域と学校とが一緒になって、学校を核とした地域づくりができる制度があるのに、使いこなせておらず、もったいない。

#### 〈委員〉

- ・近年、全国的にも地域的にも障害のある子どもが増えてきている。障害を持った人たちも様々な貢献ができるような仕組みがもっと必要
- ・人口減少社会は避けることができないので、これからは社会に根ざして地域に貢献できるような子どもに育てていくことが必要
- ・昔は中播磨地域には姫路短期大学があり、学校と連携を取りながら事業を進めていたが、最近はそのための研究や教育、研修等の機会が少ないと感じる。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・社会的包摂やSDGsのように誰も取り残さない観点というのは、2050年に向かって非常に重要な視点
- ・障害のある子どもは着実に増えているので、そうした子どもたちもいきいきと生きることができるまちにすることは重要
- ・一人一人のために皆があるという包摂、インクルージョンは重要な理念

### ■意見交換①

#### ○子育て・教育

#### 〈委員〉

- ・GIGA スクール構想によって1人につき1台の端末が、小中学校に配備されたが、それをどのように上手く使っていくか、学習支援ソフトなどを導入していかにか活用するか、また今までの本の教科書と並行して、どのような効果をあげるこ

とができるかということが課題

- ・保護者や地域住民が、学校教育に積極的に参画することにより、信頼される学校づくりが推進され、子どもが安全安心で、学べる良好な環境が整っている状況を目指すべき将来像
- ・学校教育に限らず、誰もが生涯に渡って学ぶことができ、そこで学んだことを生かして社会で活躍できる社会風土ができあがっていることが理想の将来像

#### 〈委員〉

- ・地域行事への参加が愛着形成に繋がっているのかどうかが一番大事
- ・地域での活動において、郷土愛を持った人と接する機会をいかに増やしていくかが課題

#### 〈委員〉

- ・目指すべき中播磨の姿としては、子どもを見守る地域づくりが一番大事
- ・昔ながらのおせっかいを焼く近所付き合いのように、大人が子どもを取り巻く環境をつくるのが、将来、地域を守っていく子どもを育てることに繋がる。
- ・地域の住民が積極的に子どもの教育に参加できるようになれば良い。

#### 〈委員〉

- ・地域の様々な団体が減ってきて、団体同士の連携が上手くいっていない。
- ・いろいろな話をする場やコミュニティの中で接触する機会がなくなっているため、地域行事にはできるだけ参加すべきだが、地域行事もコロナ禍で減少
- ・教育についても、地域の様々な会社やNPO法人、各種団体と連携を図りながら方策を進めることがこれからの目標

#### 〈委員〉

- ・貧富の差が原因で、教育に格差が生まれるのではないかと危惧している。
- ・コロナ禍でオンライン授業が導入されたが、親は学校に対して子どもたちに寄り添ってほしい、見てほしいという気持ちが強かった。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・地域行事と地域課題の関心を繋げることは、子どもをどう捉えるかということに関わってくる。子どもは大人から何かされる側だけではおもしろくなく、自分も役立っている、あるいは達成感があることで、地域への関心、人への関心、自分自身の肯定感が育まれる。
- ・地域行事を1つするにしても、大人が子どもにたくさん教えてあげたい気持ちもあると思うが、子ども自身が主体的に何かできることをサポートするという視点も必要
- ・地域行事がなくなり連携が難しい時だからこそ、学校が扇の要になる。学校があれば、そこが拠点になって様々な機関が関わるができる。
- ・日本の子どもの貧困率は6～7人に1人という非常に高いレベル。家庭の経済力あるいは親の教育力といったペアレントクラシーによって子どもの将来が左右されることが非常に顕著になってきている。
- ・障害があっても、あるいは経済的に困難な状況にあったとしても、自分の能力を开花できるようなまちにするという考え方が非常に重要



## ■ゲストスピーカーによる話題提供

### ○防災・減災社会の構築

#### 《説明要旨》

- ・自然災害に加えて新型コロナウイルス感染症の拡大(災害の複合化)が進む中、避難のあり方についての議論が進んでいる。
- ・これまでは行政主導の取組を改善するアプローチをとっていたが、これを根本的に見直し、住民が「自らの命は自らが守る」意識を持って、自らの判断で避難行動を取れるよう、行政はこれを全力でサポート(防災政策の方針転換)
- ・来年度は災害対策基本法が大規模に改訂される(避難情報の見直し、個別計画の策定、福祉避難所の事前公開等)
- ・新型コロナウイルスの感染が拡大している状況でも、まず大事なものは目の前に迫る危険から命を守ること。その上で、コロナ対策を考えなければならない。
- ・平成30年7月豪雨では、行政が事前に配布していたハザードマップと実際の浸水エリアはほぼ一致していたが、多くの人が避難しなかった。
- ・自分で知覚する情報をきっかけに避難する人が多い。
- ・避難しなかった理由は「これまで災害を経験したことがなかったから」が一番多く、これは経験が仇になっているケースである。
- ・5メートル浸かるとハザードマップに書いてある地域で、「2階へ逃げれば大丈夫だと思った」「外の方が危険だと思った」人は、危険を過小評価している。
- ・ハザードマップを見たことがない人は、若い世代に多い。これは学校で避難訓練を行っているが、水害や土砂災害を想定した避難訓練は少ないこと、またハザードマップについて教えていないことが原因である。
- ・学習指導要領の改訂に伴い、来年度から高校でハザードマップの知識を身につけることが必須化されるため、今後は、かなり改善されるのではないかと。
- ・避難先を知らない人は、やはり年配の人に多い。特に避難訓練に1回も参加したことがない人は、いざというときの逃げ先も知らない状況である。
- ・中播磨地域は、市川、夢前川、揖保川などの大きな川がたくさん通っており、その周辺の地域は大規模冠水が想定されている。さらに北部には、山崎断層が通っており、地震のリスクも高い。
- ・ハザードマップは、危険なところが書いてある地図であり、安全なところは書いていない。読み解いて、どこが安全なのかを理解してもらう必要がある。
- ・災害時に期待されるのは、やはり地域の人である。地域の役員だけでは災害対応は難しいため、ご近所全員で対応しなければいけない。
- ・支援される側、する側の特定化が大事。1人で逃げられる人は自身で逃げる、家族がいる人は家族にサポートしてもらう、1人ではどうしても逃げられない人は地域でサポートする。そのような仕組みづくりが求められる。
- ・感染症対策では、少人数での分散避難が重要。車両避難の場合、肺塞栓症(エコノミークラス症候群)への注意が必要
- ・災害時に子育て世代への支援が大変手薄であることも課題

- ・地域に住んでいる人（避難に手伝いが必要な人、外国人、小さな子ども等）の情報把握や、日頃からの避難の啓発活動、避難場所や災害時の声掛け体制の検討等は行政がやることではなく、地域がやらなければいけないことである。
- ・災害時の対応を地域ぐるみでやっていける体制づくりが必要

## 《質疑等》

### 〈委員〉

- ・地域で自主防災組織の活動を活性化することや、民生委員中心に地域で避難行動要支援者をサポートすること等が重要
- ・本日はソフト面の話が多かったが、川の浚渫などハード面の対策も必要

### 〈委員〉

- ・要支援者の個別計画の作成が、なかなか進まない。上手くこの計画が進められている成功例があれば教えていただきたい。

### 〈教授〉

- ・長野県須坂市では、寝たきり老人をサポートするための地域見守りネットワークを、災害時要配慮者支援の取組に生かしている。
- ・一人でサポートするのは難しいので、日頃から面倒をみている家族や近所の人、地域の人で、複層にサポートの体制をつくっていくことが必要

### 〈委員〉

- ・防災意識が低い中播磨において、避難等を啓発するためにはどうするべきか。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・今まで災害がなかったことは、たまたま幸運なことであって、特に土砂災害は過去に被害がなかった地域はリスクが高い。昨今の気候変動の関係もあり、起こるときは起こる。
- ・一人一人の認識・意識を高めることが重要であり、そのためには役割を持ってもらうことが有効。役割を持ってもらうと否が応でも参加するようになり、手伝いをしてくれるようになる。町内会として、みんなの役割を考えるような仕組みづくりをしていくことが重要

### 〈委員〉

- ・姫路市内で福祉の避難所を担当しているが、災害時には地域の全員が被災者になる可能性が高いため、そのなかで介護や支援がしっかりできるかが課題

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・福祉施設は立地に問題があるところが多くあるので、危ないエリアにある福祉施設の入所者をどのようにして地域外へ避難させるかということ、これから先、考えなければいけない。その際、施設間の連携・調整が必要になるが、施設だけでは厳しいため、行政が間に入る必要がある。
- ・避難には地域の人をサポートがないと難しいため、自分たちが避難するだけでなく、いざというときは互いに助け合うという認識を持つことが大事
- ・逃げ時は施設側だけでは判断が難しいため、行政は積極的に施設に早めに避難情報を伝えるとともに、避難についてもサポートする体制づくりが必要

## ■意見交換②

### ○安全安心

#### 〈委員〉

- ・日頃から住民自らが防災意識を持って、災害時には住民自らが安全に避難を行っていること、そして災害弱者や要援護者を地域住民が把握し、災害時には地域の力により安全に避難誘導が行われていること、また情報の提供では、防災体制が確立されており、迅速な災害対応が行われ、災害時における災害情報も迅速かつ正確に住民に伝達されていること、これらが目指すべき将来像である。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・将来的に考えてほしいのは住まい方の問題。危ないエリアに住んでいる人は災害が起こる都度、危険であるため、そのような人たちをいかに減らしていくかが大きな課題である。
- ・短期的には地域の防災意識を高めることが重要であるが、長期的には住まい方（土砂災害警戒区域や大規模な浸水が想定されるエリアに建物を建てない等）を考えていく必要がある。

#### 〈委員〉

- ・全自治会で自主防災組織は組織化されているが、形だけのところが多く、活動が続かない。
- ・県でも地域防災リーダーの研修をしているが、地域防災リーダーがいない地域があることが課題。自治会単位ではなく小学校区単位のような広域的な組織があり、そこに防災リーダーがいることが必要

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・機能する自主防災組織にすることが一番大事なポイント（町内会の役員の充て職になっている自主防災組織も多く、災害時にもあまり機能していない）
- ・災害時に機能するためには誰をメンバーとするのがよいのかなど、みんなで問題を話し合っ、機能する体制づくりをすることが何よりも大切
- ・災害対応は地元でする必要があるが、行政に期待し過ぎているところがある。自分たちで災害対応をするとなったときに、対応ができる仕組みをつくることのできる自主防災組織であってほしい。
- ・そのためには人材育成が必要だが、地域防災リーダーと自主防災組織が連携していないことや、なり手がいないということがどこにでも共通している課題
- ・防災リーダーの育成人数に目標値を設け積極的に研修に送り出すとともに、研修を受けたリーダーは、町内の残りの人に教える仕組みをつくる必要がある。
- ・地域の人に災害ボランティアに登録してもらおう仕組みを導入している自治体もある。登録者には、災害が起きれば災害ボランティアとして活動してもらおうが、普段は花火大会等のイベントにボランティアとして参加してもらおうなど、様々なイベントの機会を生かしながら機能する仕組みづくりを確立してほしい。

#### 〈委員〉

- ・地域には防災士や救命救急士、看護師、介護士、ヘルパー等の資格を持っている人（人的資源）が割と多くいる。

・そうした人たちに災害ボランティアへの参加を促し、活用していくことが重要  
〈委員〉

- ・自主防災組織のような地域の組織については、全く機能しておらず、言われたから役員になったという人が田舎では多い。
- ・危機意識を持ち、地域の人たちに知らしめるようなリーダーづくりが中播磨にも必要。そして地域と行政の連携をもっと深めていく必要がある。

〈ゲストスピーカー〉

- ・若い世代や女性の参画を促す機会づくりが大事。若い世代や女性は、普段参加する機会がないだけであり、防災に関心が高い人も多い。そういう人が参加しやすい場づくりができると良い。

〈委員〉

- ・30年先を見越して、浸水の危険がある建物は、次の建て替え時に避難が可能な高さまで階数を増やすよう義務づける規制は難しいだろうか。

〈ゲストスピーカー〉

- ・日本全国どこでも、災害による被害を受けるリスクはあり、リスクが全くないところに住むことは難しい。そのため、命を守る行動を取れるようにすることは大きな課題である。
- ・地域に住む人にハザードマップを配るだけではなく、みんなに逃げるという認識を持ってもらうように働きかけることが必要。これから先、行政はその働きかけをちゃんとしているかを問われる。配るだけではなく、理解してもらい、自分の身の安全を確保してもらうようにするところまで、働きかけは必要

〈委員〉

- ・災害時に、避難所に物資が運ばれてくると、コンビニに歩いて物を買に行ける状況でも、被害者意識が強いために、定期的に届く飲み物などの支援物資をもらわないと損という気持ちが働き、高齢者など本当に困っている人に譲るといった気持ちがなくなっていく状況下だったと聞き、寂しく感じた。

〈ゲストスピーカー〉

- ・若い人と年配の人とでは、どちらかという若い人の方が生活は苦しい。特に20代、30代で結婚したばかりの人。子どもが小さく、家も新築したばかりでローンを抱えている世代は、物がほしかったのだと思う。それぐらいお金に困っている、将来に不安を抱えている人がいるということが実情である。
- ・外部から支援に行く人はそこまでは見えない。実は、被災した人たちには、外からは把握しづらい背景があることを、支援側も知る必要がある。
- ・中播磨地域は、阪神・淡路大震災でもそこまで大きな被害を受けておらず、中播磨が安全だと思い込んでいる人が多くいることが実情である。今まで災害がなかったから大丈夫というのは経験が仇になってしまうケースでもある。災害がなかったからこそ、地域の防災力を上げていき、これから起こる災害に備える取組をしてもらいたい。

(以上)